

【奨励賞】

みんな違って当たり前

東近江市立能登川中学校 3年 織田 実里

最近、どんな人にも平等な世の中になってほしいということをよく耳にします。しかし、現実には平等であっても公平ではなく、一般的な人を基準として考え、その人達に合わせた対応をされているのが現状です。

私は自閉スペクトラム症で、三歳の時にそう診断されました。そこから公的な支援センターで支援を受け、小学校を卒業するまでは「特別支援学級」に在籍していました。中学校に入学してからは自分の性格的なこと、高校からは支援クラスがないこともあり、通常クラスの環境に慣れるために支援クラスではなく、通常クラスの方を選び通学しています。

中学生になり、そのクラスで過ごしていて私が思ったことは、生まれつき歩けないなどの「目に見える」体の障害に対してはそれに適した配慮がされて、それとは裏腹に、私が生まれつき持っている自閉スペクトラム症などの「目に見えない」精神的な障害については理解がされにくいことです。支援計画がされていても、それが共有されているはずなのに間違った対応が行われたり、公平にしてほしいのに一般的な人が私のような人が支援を受けているのを知って、その一般的な人が自分と比べ、支援されている人のことを特別扱いしているのと思ったりしていることがあります。私はそのことによって自分の事を理解してもらえず、一方的に否定的なことを学校側の立場の人に言われ、精神的に追い込まれたり、友人だと自分が思っていた人たちから一方的に嫌がらせを受けたりしています。私には確かに一般的ではない部分がありますが、一般的な人達と違って自分ではうまくいかない部分を、その人達と同じように出来るようになりたいと思って努力しています。そうしてうまくいった成功体験が二つあります。

一つ目は、パニック状態になる回数が減ったことです。パニックは特性からくるもので、その中でも特に出やすいものでした。小学校まではそれがひどく、授業中にそれが出てしまい、授業を抜けることがよくありました。しかし、中学生になるとそれをコントロールする力がついたのか、その状態にならなうことを減らすことができました。

二つ目は、人とのコミュニケーションができるようになったことです。これも小学校の四年生くらいまでは友達や話せる人が少なく、一人の時間が多かったのでそれを行う機会が少なかったのですが、時間がたつにつれて話せる人が増え、それにともなってコミュニケーションをとる機会も増えました。今では、話しかけると言うよりは誰かに話しかけられたら話をする事ができるまでに至っています。

この二つの成功体験につながったのは、自分ひとりの力ではありません。まわりから支援や配慮をしてくださった先生方や私のことを理解してくれた当時のクラスメイトのおかげです。

これまでの内容をふまえて、私のような自閉スペクトラム症の方だけでなく、障害といわれるたぐいにあてはまる方々、ジェンダー問題を抱えている人などがいますが、それを理解してもらえない方々は「普通って何だろう？」「公平って何だろう」と思って生活し、自分が生きる意味に悩んでしまうこともあるのではないのでしょうか。私は今、ちょうどそういう時期に入っています。なぜなら小学校の時は支援・配慮をしてくださる先生方やクラスメイトがいたので少しは楽しく過ごせたけど、中学二年からは、自分のことで精一杯なのか支援・配慮をしてくれる人がいなくなり、理解してくれる人もいなくなったからです。

自分のことを理解してくれる人がいれば安心できますが、現実はそうではありません。相手を知ろうとせず、相手のことを理解できない人もいるのです。

自分基準で物事を考えずに、相手のことを知って認め合うことができたなら、誰かを基準とした平等ではなく公平な、差別のない認め合える世の中にする事ができるのではないかと考えました。

当事者からの目線で差別について考えてみて、自分でも周りのことを自分基準で考えたり、偏見の目で見たりせずに、困っている人がいれば積極的に声をかけにいきたいと思いました。